

α世代のウェルビーイング



福井県小学校長会

会長 氣谷 達郎

今の小学生を含む2010年代以降に生まれた世代は「α世代」と呼ばれるそうです。α世代は「Z世代」（生まれた時からインターネットがあり、10代でスマホやパソコンに触れている世代）の次の世代で、生まれた時からSNSやデジタルデバイスが日常に溶け込み、義務教育の中でプログラミングやオンライン授業が行われる環境で育っている世代だということです。高度成長期後半に生まれた私たちは「X世代」だそうですが、自分の約60年を振り返ると、まさに隔世の感があります。幼少期に家庭に普及したテレビは、まだ白黒からカラーへの移行期にありまして、インターネットが一般に広まったのは大人になってからのことです。ドライブには紙の道路地図が欠かせませんでした。ワープロからパソコンに切り替えたのは教員として働き始めてからのことでした。今では、こうした記憶は「昔の人の暮らし」として教材になるほど、時代が進みました。

さて、2年に1度発表される「幸福度ランキング」（日本総合研究所）が、令和6年10月に発表され、福井県が6回連続で総合1位となりました。これはあくまで一つの統計ではありますが、新聞やテレビ、ネットニュースでも大きく取り上げられていることから、国民の関心が高く、一定の影響があるということだと思います。特に「教育分野」のランキングで福井県は7回連続で1位となっており、学力の高さや不登校児童の少なさなどが要因のようです。不登校は全国的に増加傾向にあるものの、福井県ではその数が比較的少ないことが反映されているようです。ランキングは相対的なものではありませんが、各都道府県の状況が多くの指標に基づいたデータをもとに示されており、一定の客観性はあるものと考えられます。私たち福井県民としての「幸福度」の実感はどうでしょうか。

近年「ウェルビーイング」という言葉が頻繁に使われるようになりました。一時的な幸せ（ハピネス）でなく、

心身の健康（ウェルネス）にとどまらず、社会的にも満たされた状態がウェルビーイングで、1946年のWHO設立時に初めて使われた言葉だということです。今日では日本の教育分野においても注目されており、令和5年に閣議決定された第4次教育振興基本計画ではキーワードとなっています。福井県教育委員会が進めている第4期計画に向けた「ふくいの教育振興推進会議」においても「子ども一人一人のウェルビーイングの実現につながる主体的なキャリアデザイン力の育成」が論点の一つとされました。

不確定で先が見えない未来に向けて、α世代をウェルビーイングの視点から持続可能な社会の担い手として育てることは、現代社会における重要な課題です。デジタルリテラシー教育を充実させ、テクノロジーを安全かつ効果的に活用する力を育むことは当然必要です。しかし一方で、デジタルコミュニケーションの普及に伴い直接的な対話を避けがちであったり、肯定も否定も「大丈夫」、良い状況も悪い状況も「やばい」で済ませてしまったりするような風潮の現代だからこそ、言葉の力を磨いて共感力やコミュニケーションスキルを育むことも一層重要です。また、困難に打ち勝つ力や問題解決能力を養うことも、小学校という集団生活の場においてますます大切になっていると感じます。

令和8年10月には「東海・北陸地区連合小学校長会教育研究福井大会」が開催されます。既に役員による計画委員会が始動し、教育研究委員会を中心に大会主題や分科会の視点の見直しが進められています。次年度には実行委員会が立ち上がり、準備が本格化する予定です。この福井大会が、各県の小学校長にとって未来志向の貴重な議論の場となることを確信しています。福井大会、さらにその先を見据えて、α世代のウェルビーイングを実現するための教育の在り方を共に探究し、前向きな取り組みを進めていきましょう。

第76回福井県小学校長教育研究二州大会

教育長挨拶概要

福井県教育委員会

教育長 藤 丸 伸 和



令和6年度の第76回福井県小学校長教育研究二州大会の開催にあたりまして、お祝いを申し上げます。

本日お集まりの小学校校長会の皆様方には、日頃より子どもたちの健全育成に多大なるご尽力を賜りまして、本当にありがとうございます。この場をお借りして、心からお礼を申し上げます。

また、本日の研究大会の開催にあたりまして、氣谷会長はじめ校長会の皆様、そして地元の敦賀市、美浜町の皆様には多大なるご協力、ご支援いただきましたことを、重ねてお礼申し上げます。ありがとうございます。

私は、5月19日に教育長に就任をさせていただきました。精一杯この教育行政、福井の教育を前に進めていけるように頑張っていきますので、皆様のご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

私は県の職員として、3月までは未来創造部の部長を務めておりました。北陸新幹線の整備促進、まちづくり、交通政策等に携わってきました。この3月に、北陸新幹線がついに福井、敦賀に開業しました。この敦賀は当面の終着駅として、大変な賑わいを見せている状況です。

私は、「まちづくり」というのは「人づくり」と不可分なものだなというふうに考えています。まちの未来を作るのは、やはり人です。その人を育てるこの教育の役割の大きさ、責任の重さを感じているところです。

福井の未来はとても明るい、私は思っています。この北陸新幹線が開業し、そして多くの観光客、ビジネス客が福井に訪れ、これまであまり福井を知らなかった方も、福井に来てみて「福井って結構いいよね」「人もあったかいし、食べ物も多いし、見るところもたくさんあるよね」というふうに言っていただきます。こうしたことが、我々の自信と誇りにつながっていきます。

福井県民は、とすると、ちょっと自虐的に「福井には何もないよね」とか「福井って地味だよね」と、ついネガティブな言葉を無意識に発してしまうことがあったように思います。これからは、福井の良さをどんどん我々大人が子どもたちに伝えていくということが、何より大事であると思っています。「福井の将来が明るい」そして「福井の良いところがたくさんある」こうした前向きな言葉をぜひ子どもたちに伝えていただきたいと思いま

す。「何もない」と大人に言われて育った子どもたちが、将来福井に残ってくれるのか、ということが私の気がかりな点です。そうしたことを、これから払拭していきたいと思います。

昨日、知事と教育委員と意見交換をしながら、「教育に関する大綱」の改定に向けて準備を進めたところがあります。「教育に関する大綱」は、5年前に策定し、今回はその改定となります。5年前に大きくモデルチェンジをしましたので、今回は基本理念や目指す人物像、育てたい人物像については維持をしながら、具体的な政策のところを新たに書き加えています。

近々、ホームページにもアップしますので、ぜひ校長先生方にも一読いただき、ご意見を賜りながら10月の策定に向けてさらに作業を進めてまいりたいと考えております。

地域の未来が明るいということを子どもたちに伝え、そして自分の将来をどう過ごすのかということを考えていくような「ライフデザイン教育」を推進してまいります。小学生から未来への希望と夢を育むためには、地域で頑張っている大人たちの生き様を見せていくということも、さらに重要になってきます。そうした取組も拡充していきますので、皆様方の一層のご支援ご協力を賜りたいと思います。

今回の大会主題「自ら未来を拓きともに生きる豊かな社会を創る」そして副題の「夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び未来を生き抜く力を育成する」という考え方を、まさに我々が今議論している教育大綱に盛り込んでいるところです。本日の8つの分科会での議論が、素晴らしい意見交換になることを祈念しております。

結びに、本研究大会のご盛會と、そして本日お集まりの皆様方のますますのご活躍を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。



時流潮流

魅力ある水族館づくりをめざして
65年のあゆみと体験型水族館への取り組み

越前松島水族館

顧問 鈴木 隆 史



越前松島水族館は昭和34年(1959年)に開館し、今年で開館65周年を迎えました。当館は三国観光産業株式会社的水族館事業部として運営されており、三国ボートレース場の施設会社である当社が事業収益の地元還元を目的として建設したものでした。当時は動物園や熱帯植物園、遊具なども併設した総合レジャーランド的な水族館で、開館当時の入館料金は大人50円、小人30円でした。

水族館の社会的位置づけとして、文部科学省では博物館類似施設とされていて、教育文化施設としての役割を担っています。その大きな役割は「種の保存(自然保護)」「教育」「調査・研究」「レクリエーション」の4つが唱えられています。当館でも繁殖や野生生物の保護、研究、各種企画展などに取り組んでいますが、今回は魅力的な施設づくりについてお話します。

当館が開館した頃は、近隣地域のレジャー施設がまだまだ少なく、海水プールやプラネタリウムの新設効果もあって、昭和50年(1975年)頃までは毎年30万人以上のお客様が来館していました。昭和55年(1980年)には北陸初のイルカショーを始めたり、ペンギンのショーやお散歩を始めるなど楽しいアトラクションを充実させていきましたが、年々レジャーの多様化が進んだ事が影響してか、平成6年(1994年)頃からは入館者数が徐々に減少していきました。

そして平成9年(1997年)には、タンカーの座礁事故による重油災害の影響で、数か月にもわたりイルカ達の避難を余儀なくされるなど水族館運営に大打撃を受け、風評被害もあいまって入館者数はなかなか回復しませんでした。

その後、ふれあいができるアザラシプールを新設したり、プラネタリウムに代えて「クジラの立体映画」の上映や、夏期のナイター営業も本格的に開始したり、いろいろな企画展を開催するなどしましたが、平成15年(2003年)度の入館者数は約15万人まで減少し、水族館の存続が厳しくなりかけました。

ちょうどこの年に私が館長に就き、前館長の「みて・ふれて・楽しく学べる水族館」という路線を引き継ぎながら当館の魅力を最大限に発信出来るように、限られた予算の中で創意工夫をしていくことになりました。珍しい生き物や希少種などを展示する事も必要ですが、ありきたりの生物であっても見せ方(魅せ方)を工夫する事によって、その生物に関心や興味をもってもらい、生き様を感じてもらえるような施設づくりを目指しました。

まずは、休憩所を改造して、当時は珍しかったサメやエイ、巨大なタコにさわれる水槽を設置し、国内初

の「ふれあい館」としてオープンしました。

同年に、海水プールを改造して子ども達が魚といっしょに泳げたり、餌やりができたり、安全に疑似海水浴ができる「じゃぶじゃぶ海水プール」をオープンしました。

その後も、国内では珍しい国内外の約30種類のカエルの展示とケヅメリクガメの餌やりができる「かめ・かえる館」を新設。さらに、猿ヶ島を改造してウミガメに餌やりができる「うみがめ館」をオープン。産卵も視野に入れて交尾行動が可能な水深にし、産卵用の砂場を設けました。その甲斐があって平成20年(2008年)にはアオウミガメが初めて産卵し、子ガメの育成にも成功しました。国内のウミガメの屋内展示施設では初めての快挙でした。現在展示している6頭のアオウミガメは当館生まれです。

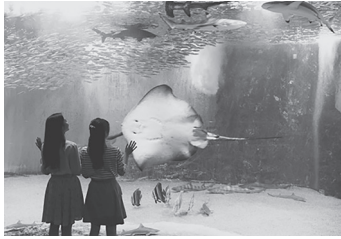
また夏季のイベントとして、子ども達が自然の海の生き物への関心を高め、親御さんとお子さんとのコミュニケーションの場にもなるように、目の前の海岸を利用した「磯の生物観察会」を企画しました。その後も、北陸では初めての「マンボウ水槽」を新設したり、泳ぐ様子を横からも観察できる「新かわうそ館」をオープンしたり、毎年のように赤ちゃん誕生(イルカ、アザラシ、ペンギン、カワウソなど)の話題があり、入館者数は徐々に回復していきました。

そして一番の転機となったのが平成21年(2009年)の開館50周年を機会に計画した『新イルカショープール』と『海洋館』の2つの新施設の誕生です。

『新イルカショープール』には約700席の観覧席を作り、プールにとっても近くて迫力満点のイルカショーがご覧になれる、ろ過循環設備を導入したことによって透明度が良くなり、横からも観察できるガラス窓を設けてとても見やすいプールとなりました。さらに加温や冷却装置を導入しましたので、イルカたちの快適性が増しました。また、照明設備も強化したのでナイトイルカショーも可能になりました。



『海洋館』には2つの水槽を作りました。1つ目の「海洋大水槽」は幅10m、奥行き6m、水深3.3mで水量が約200トンの大型水槽で、サメやエイとイワシの群れをメインの展示とし、とても雰囲気の良い癒される水槽となりました。



もう1つの水槽は水量が約40トン、水深が約2.5mの「さんごの海」水槽です。美しい珊瑚礁の魚たちが泳ぐ水槽の水面にアクリルガラスを乗せて、その上を歩ける仕掛けにしました。水槽の上から見ると、床がガラス張りの不思議な超異次元空間が体感できるシースルー室です。この水槽の発想は、沖縄で体験した「グラスボート」です。船の底のガラスののぞき窓から珊瑚礁の海中を間近に見ることができて、この上に乗れたら、なお一層楽しくドキドキ、ハラハラ、ワクワク体験ができるのではないかなと思います、ずっと構想を膨らませていました。シースルー室を見学するお客様の反応は上々で予想が的中しました。



これらの新施設の効果により、この年の入館者数は前年の約1.5倍に増加し、34年ぶりに28万人を超えました。

それから後も、海洋大水槽の前で一晩中過ごせる「オールナイト水族館」や、普段は入れないバックヤードをご案内する「裏側探検ガイドツアー」の企画も開始しました。

それから後も、海洋大水槽の前で一晩中過ごせる「オールナイト水族館」や、普段は入れないバックヤードをご案内する「裏側探検ガイドツアー」の企画も開始しました。

平成23年(2011年)には、南極周辺の3種類のペンギンを展示した「新ペンギん館」を新設。大きく深いプールには半トンネルのアクリルパネルを設け、陸地の床には足の健康のために玉石を敷き詰め、壁には南極らしい絵を描き、一部はカガミにして多くの仲間がいるように見せました。展示室内の気温や水温は一年中15℃を超えないようにし、照明の点灯は南極の日照時間に合わせて自然に近い環境にしました。また、冬季には屋外へ散歩に出せるように通路の工夫もしました。

平成24年(2012年)には築54年が経過し老朽化が進んだ3階建ての本館を改修(減築)して平屋にして「おさかな館」としてオープン。1階にずらっと並んだ「汽車窓展示水槽」は国内の水族館にはほとんど現存していない貴重な展示手法のためにあえて残すことにしました。

平成25年(2013年)には、当館の展示魚の目玉の1つにしている日本海の深海の珍魚コンペイトウを展示する「こんぺいとうハウス」を新設。半球形のこの建物は保冷効果のある発泡ポリウレタンという特殊な建築資材を使った建物で、深海の冷水に生息するこの魚の展示水槽を設置するには最適の形状と材質でした。外壁にはコンペイトウに似せた絵を描き、かわいい建物にしました。

平成26年(2014年)にはカマイルカプールを改造して「新ペンぎんらんど」をオープン。広い土の陸地には人工のサボテンを植えてフンボルトペンギンの生息地を再現し、大きくて深いプールを設けました。陸地には空中ハート水槽を隣接させ、ペンギンが空を飛んでいるかのように泳ぐ様子を真下から見られるようにしました。

平成28年(2016年)には「ジュラチックアクアリウム」コーナーをオープン。古代から姿形を変えずに子孫を残している「生きている化石」コーナーです。平成29年(2017年)には、入口近くにあったマンボウ水槽を建物内に取り込んで「マンボウ売店」を新設。

平成30年(2018年)には、「磯の生物観察会」を本格的に実施するにあたり、更衣室やシャワー室を完備した「マリンハウス」を開催場所の近くに新設し、2階は美しい日本海が眺望できる展望室にしました。

令和元年(2019年)には、開館60周年事業として旧売店のスペースに「海の幸タッチコーナー」をオープン。高級食材になる魚たちのふれあい水槽や餌やり水槽を増設して、豊富な体験水槽をさらに充実させました。

そして、開館65周年事業として令和6年(2024年)春に国内初の「みずだこ館」を新設。ちょうど北陸新幹線の福井県延伸も併い、福井でもたくさん漁獲される世界最大種のタコ「ミズダコ」に特化した特徴のある新施設を作りました。



インパクトのある巨大なミズダコの造形物の足の中には大小のミズダコにふれあえる6個の水槽を設置し、別の親ダコ水槽では産卵して卵を守る様子、小水槽ではふ化してきた赤ちゃんダコの展示、ガラス張りのバックヤード「タコラボ」では赤ちゃんダコの育成の様子を見てもらうなど、ミズダコの飼育研究の成果をお客様に伝えたいというスタッフの熱意を実現させました。

当館の展示施設は、大型の水族館とは異なり、いくつものミニパビリオンが敷地内に点在するスモールテーマパークとなっていて、各展示施設が独立しているので改修しやすい構造だったことも利点になりました。

この紙面では紹介しきれなかった取り組みも数多くありますが、それぞれの企画に対するお客様の反響は大きく、当館のコンセプトである「みて・ふれて・楽しく学べる、体験・体感型水族館」を、お客様目線で構想を実現し、どんどんグレードアップした事で、国内トップクラスの体験型水族館と言われるまでになりました。

現在の入館者の内訳は県外客が約7割、大人・小人・幼児の比率が7:2:1で、近年の入館者数はコロナ禍の影響で激減した令和2年～3年を除けば年間27万人前後で安定しており、今年度は30万人を超える見込みです。今後もさらに進化を続ける越前松島水族館にどうぞご期待ください。

退職校長の言葉

校長としての4年間を振り返って

〈福井市〉湊小学校長
山本 智広

「退職校長の言葉」の原稿依頼をいただき、何を書こうか悩んだ結果、役職定年を迎えることにちなみ、校長として務めた4年間を振り返ってみることにしました。

湊小学校校長の内示を受けた4年前、これまで中学校でしか働いたことがない私は、小学校で働くことに不安で、とても複雑な心境になり困惑したことを覚えています。小学校で授業をしたこともないし、職員はほとんど知らない人ばかり、右も左もわからないとはこういった状況を指すのだと痛感しました。そんな状況の中で私の校長生活はスタートしました。

校長1年目、最初の職員会議は校長としての教育方針をカッコよくキメ、強いリーダーシップを発揮…といきたかったところですが、そんな心の余裕も深い考えもなく、とりあえず「先生方が元気な学校にしたい。」とだけ伝えて終わりました。私が教頭になった頃は、校長は強いリーダーシップをもって学校を引っ張っていかなければならないという考えが多かったように思いますが、私は初めての小学校で自信がないこともあり、小学校をよく知っている先生方を信じて、肩の力を抜いて学校運営をすることにしました。

校長2年目、この年は次々と大きな事件が起きた年でした。新聞やネットニュースを賑わすような事件が2件。ニュースにはなりませんでした。校内で児童が大けがをする事件も起こりました。どの事件の対応も、今まで経験したことがないものだったため、夜も眠れない日々が続く、自分の危機管理の甘さを痛感させられた1年でした。ただ、皮肉なことに、これらの事件に一つ一つ向き合い、職員とともに対応したことで、学校全体の危機管理意識が高まるとともに、職員間に良い関係が構築されていったことは不幸中の幸いでした。

校長3年目、この年は若手教員のサポートに奔走した年でした。ほぼ毎日、朝の活動の時間から給食まで教室に張り付き、児童達と共に過ごし、活動を見守ったり、徘徊する児童の後を追いかけていたりしていました。でも、大変だと感じたことはなく、むしろ中学校しか経験したことがなかったため案外楽しい時間でしたし、子ども達の成長を直に感じる良い機会にもなりました。

校長最後の年、無能な自分をサポートしてくれた職員のおかげで、4年間で最も落ち着いた雰囲気为学校になりました。先生方が元気な学校にしたいという思いが叶ったかどうかは私にはわかりません。ただ、職員室から笑い声と、先生方が楽しそうに会話する声が響く学校にはなったようです。

来年、管理職ではなくなります。授業は11年間していません。すべてが不安でいっぱいですが、教職の最後を子ども達とともに楽しみたいと思います。

道を拓くプロセスを振り返る

〈福井市〉麻生津小学校長
斎藤 弘子

今改めて、歩んだ道を振り返っています。気付いたのは自分が「書く」ことを通してビジョンを探り方向性を見定め道を拓こうとがき続けてきたということです。

大野市で小学校に採用された初日に「君は書写部会」と言われ、県書写書道教育研究大会の実践発表者になりました。保護者懇談会で「休み明けから1年生の担任が変わります」と紹介され、本人も含め皆が驚きました。異例の担任スタートにより、授業研究と学級経営に悩んだ末、始めたのが週1回の手書きの学級便り「あのね」です。その年1度だけ便りを出せなかった日があり、放課後、保護者の方が「大事なお便りを子どもが持って帰ってくるのを忘れてすみません」と来校されました。恐縮すると同時に心からありがたき思い、細々とでも誠意を込めて伝え続けることの大切さを痛感した瞬間でした。私の「書いて道を拓く」歩みの原点です。

福井市の小学校では研究主任として県外派遣研修と市「いきいきスタディ」教材開発事業を経験させていただきました。作成した冊子に「伝え合う力を育てることはイソップ『北風と太陽』のようだ」と書き、「子どもが自らの力を出せる教育を」という信念が生まれました。

県教育庁義務教育課では小学校と幼児教育をつなぐ使命のもと保幼小接続カリキュラム作成に携わり、文部科学省委託研究や国の委員、様々な自治体依頼のプレゼン作り等により、初等教育での資質・能力育成の重要性和「書いて『流れ』を創る」学びをいただきました。

校長職になり、福井大学附属幼稚園と教職大学院を兼務した時期の「書く」では、数値目標達成と生き残りをかけたアピールという難題が立ちはだかりました。独学で一からSNS発信を学び、日本中から寄せられる「いいね」に励まされ、子どもの姿の意味を毎日書き続けました。目に見えない力を信じ発信する重要性を学びました。

そして校長最後の麻生津小学校では、スクールプランを発展させ、ホームページ・学校便りで家庭・地域・教職員に発信を続けました。1年間で閲覧数が6万を超え、保護者から「読んでいます。頑張ってください」と声をかけられたり、地域の方が学校便り持参で校長室に来てくださったりすることに励まされ、「初心を忘れまい」と自分を奮い立たせてきた日々でした。

様々な出会いと支えをいただき、心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。手探りの歩みの一端ですが、わずかでも、予測不可能な時代の教育を担う仲間の皆様へのエールになれば幸いです。

校長としての4年間

〈大野市〉富田小学校長
大石美弥子

校長として赴任した学校は、以前7年間勤務していた木のぬくもりが感じられる、温かみのある富田小学校でした。教員生活の3分の1近くをこの富田小学校で勤めたことになります。かつて担任をしていた児童の兄弟が在籍しており驚きましたが、懐かしさと安心感を覚えました。そして校長としての4年間が始まったのです。

私が理想としていた校長の姿は「凛とした校長」です。これは私が尊敬する女性校長の姿でもあります。1年目は、教頭の職と担任の職が抜けきれないまま走っていたように思います。教職員に任せきれず自分が動いてしまうこともありました。ちょうど児童にタブレット端末が一人一台与えられ、主体的で対話的な学びが本格的に進められた頃でした。3か月後の市教育委員会訪問日までに端末を活用した授業を求められ、できることは何かと教職員皆で必死に考えたことが思い出されます。しかし、短期間であったにせよ、その時決めた本校のタブレットルールは、今もあせることなく使われています。未来を見通した教職員の力に「みごとであった」と言わざるをえません。また、対話を取り入れ、子どもを主語とした授業づくりについては、目指す児童の姿、教員の姿を見つけるために、何度も何度も教職員と対話を重ね、他校の授業参観を幾度もしました。もやもやしながらも前に進んでいた頃です。そんな時、3年生児童から手紙をもらいました。「私の夢は大石校長先生みたいな校長先生になることです。校長先生と話していると、考えさせてくれるし、将来頑張ろうと思えるし、前に進めるので、私も校長先生になってみんなを喜ばせたいです。」この手紙に励まされることになりました。

2年目。メンバーが一気に若返り、若手がよい刺激を与えてくれるようになります。ICTが進み業務改善のカードが増えていきました。さらには目指す姿がはっきり見えるようになりました。3年目も組織は若くなります。それでも、授業が変わってきたこと、教職員の意識が揃ってきたことを全員が実感できるようになってきました。

そして4年目。教職員の意識を揃え「よりよく」を合言葉にもやもやしながらもコツコツ積み重ねてきたことが、授業だけでなく、行事や毎日の生活のあらゆる場面で、目や肌で感じられるようになってきます。そして、授業や行事を参観したり、学年便り、学校便り等を読んだりした保護者や地域の方が、その学びの変化に気付き、私たちに伝えてくれるようになりました。この上ない喜びです。

そしてもうすぐ退職です。これまでお世話になったすべての皆様に心から感謝申し上げ、校長としての職務を閉じたいと思います。私が理想としていた「凛とした校長」とは少し違った姿であったかもしれませんが…。

教員生活を振り返って

〈坂井市〉春江小学校長
中村 敏明

私の教師生活は永平寺中学校勤務から始まりました。黙想や無言清掃における「師弟同行」、生徒会を担当し、生徒とともに校則改正運動に取り組んだこと、初めて学校外の施設を会場として文化祭を行い、そこで生徒会執行部と町民によるシンポジウムを企画したことなど、最初の赴任校での経験が、現在の教育観につながっています。

次の春江中学校では、卓球部顧問として、2度夏の県大会で優勝できたことは、自信につながりました。また文化祭では、毎年、クラス劇の発表に取り組みました。夏休みになると、県立図書館に行き、劇の台本を探しましたが、年を重ねるとネタもつききて、とても悩んだことを覚えています。現在でも、正月のクラス会に誘われると、このクラス劇の話題が出てきます。この春江中時代の経験から、教員の大切な仕事が、「成功体験をさせること」であると信念をもつようになりました。

次の三国中学校では、生徒指導主事を担当しました。それまで、学年指導部も経験したことがなかっただけに、本当に戸惑いましたが、当時の教頭先生から、「とにかく褒めてやれ」と言われたことが「それならやっていけるかな」と妙な自信になったことを覚えています。また、週に一度、地元の警察署に顔を出すようにしましたが、現在では考えられないことだろうと思います。

次の丸岡南中学校は、「教科センター方式」や「スクエア制」を取り入れた、全国でも特色ある学校です。初めて学校に挨拶に行ったとき、当時の校長先生から、「これまでの実績はすべて忘れて、本校の方針に従ってほしい。」と言われたときは、自校に対するプライドを感じました。部活動後、顧問・副顧問に関係なく全教職員が玄関に立ち、生徒の下校を見送りましたが、このような温かい校風が、生徒との信頼関係につながっていたと思います。また、この在籍時に福井大学教職大学院で学ばせていただきました。

そのような教諭としての経験を経て、教育総合研究所勤務、教頭としての春江東小学校勤務、そして現在の春江小学校勤務に至っています。昨年は、校長として自分の母校である春江小学校の創立150周年記念事業に携わることができ、その責任の大きさに緊張するとともに、喜びを感じることもできました。こうして教師生活を振り返ってみると、子どもの成長とともに歩めるこの仕事は、やりがいにあふれたものであると、改めて実感しています。そして、このような気持ちをもち続けられたのは、まわりの人の支えがあったからこそと、感謝いたします。これまで本当にありがとうございました。

徒然なるままに ～退職を前に思うこと～

〈越前町〉四ヶ浦小学校長
佐々木史世

この未熟な私が校長になり、しかも複数の教え子を保護者にもつ学校の閉校を見届け、退職の日を迎えることになるとは、思ってもみないことでした。

教職に就き、絶えず感じていたことは、「自分は教員には向いていない」ということでした。人を育てることの難しさに、いつも七転八倒・四苦八苦していました。

それが、冬のある日、教育長に呼び出され、越前町の指導主事を命じられました。もちろん、力不足で不適任であることを力説しましたが、聞き入れられる訳もなく、後日謹んで拝命いたしました。

これが私のturning pointになったことは、間違いありません。しかし、どうしてこの未熟な私が指名されることになったのか、そこがずっと謎でした。

教育長と同じ学校に勤めさせていただいたのは、20代で若く未熟な2年間だけ。そのころの私は、指導力はなく、褒められたものでは全くありませんでした。

しかし、研究発表はよく当たりました。小学校教育課程研究集会や北陸四県算数数学教育研究会、道徳の中部地区大会、県の事業の「学力向上フロンティア」、「コア・ティチャー」等々。

お陰様で、無茶苦茶でも勉強はしました。昨今の研究会はなかなか意見が出ませんが、昔の研究会は根底から覆されることもさもありなんで、研究会が新たなスタートになることもありました。研究をして、やっと手応えを感じ指導法を確立したと思った矢先に、それはもう古いことに気づかされ愕然としたこともありました。

しかし、悪戦苦闘している姿を評価してくださった方がいたのでしょう。そう考えると、研究の機会を与えていただけたことに感謝です。一緒に勉強した児童・生徒、先生方、教育委員会、すべての皆様に感謝です。

役職定年後、2年間の定年延長も、皆様同じでしょうが全くの想定外でした。可能性が広がったことで、逆に来年をどのように迎えるか、大変悩んでいます。

私は、「終身雇用の時代は終わった。これからの時代は、転職してキャリアを積むべきだ。」と思っています。だから、「潔く退職して、別の職業に就こう。」と考えていました。しかし、現実はなかなか厳しいです。

また、定年を延長するなら、学級担任をも辞さない覚悟で臨むべきだと思っています。そうでないと、その分周囲の職員の負担を増やすことになってしまいます。

一方、教職に心残りもあります。それは、AI時代に入った今こそが日本の教育の転換期なのに、自分の力不足でそれを十分に進められなかったことです。

私の未来予想図は未だ完成しませんが、得がたい経験と皆様との出会いに心から感謝申し上げます。

37年間の教員生活を振り返って

〈南越前町〉河野小学校長
牧野 吉伸

この37年間、たくさん子どもたち、保護者、地域の方々、先生方との出会いがありました。その出会いに対する感謝の気持ちで、自身の歩みを振り返ってみたいと思います。

私は昭和63年に敦賀市の松原小学校に新採用となりました。当時の松原小学校は、若い先生方が多く、青年部が8割以上を占めていました。みんなで遅くまで教材研究をしたり、毎日の学級通信を作ったりしていました。月に何回かは飲み会もあり、大変思い出深い生活でした。また、本町にあった男子教職員寮での生活も懐かしい思い出です。風呂もトイレも台所も共同でなかなかの生活でしたが、若さでそれをカバーしていたように思います。

越前市に異動になってからは、市内の小学校、市教委、中学校と20年間勤務しました。市教委では生涯学習課の社会教育主事として、社会教育に携わる仕事を経験しました。様々な社会教育団体の方とのつながりや行政の経験は今も大きな財産になっています。また、40代前半で異動した初めての中学校勤務では、最初は戸惑いもありましたが、自身の社会科の授業作りに励み、生徒の興味関心が高まるような様々な工夫を凝らしました。また生徒指導、学年主任などの仕事を任され、学校全体や学年の先生方と協力して物事を進めていきました。大変ではありましたが、充実した日々を過ごすことができました。

40代終わりになってから、地元の南越前町に異動しました。今庄中学校勤務を経て、河野中学校で教頭として、河野中学校の閉校にも携わることができました。閉校記念実行委員会を立ち上げ、PTAや地区の方々の協力を得て、思い出に残る閉校式にしようと尽力しました。特に閉校式で流した思い出のムービーは、過去の写真を集め、それをデジタル化し、ムービーに編集するというなかなか大変な作業でしたが、当日は参加者全員が見入ってくださり、「良かった。」という感想をたくさんいただきました。とてもうれしかったのが昨日のように思い出されます。その後、南越地方教育委員会連絡協議会の教育審議監として、地教委連の仕事にも携わることができました。管内の様々な学校を訪問し、多くの先生方の授業と学校の様子を拝見できたことは大きな財産となり、自分自身の目指す学校像を明確にすることができました。

河野小学校の校長となってからは「えがおかがやく」を学校の教育目標に掲げ、子どもたちにも教職員にもwell-beingな学校づくりを目指してきました。

これまで多くの失敗もありましたが、周囲の方々に支えられ何とかやってこられたとつくづく感じています。今後は側面から、学校への恩返しができるよう努めていきたいと思っています。今までありがとうございました。

美しい自然に囲まれて

〈敦賀市〉黒河小学校長
柿本 陽子

校長室の窓から毎日見上げる野坂岳。どっしりと構える雄大な双耳峰は、私にいつも勇気を与えてくれました。四季折々の自然に恵まれたこの黒河小学校で勤めることができたことは、本当に幸せなことでした。

黒河小学校には管理職となって初めて赴任しました。全学年単学級で7学級。素直で明るい子どもたちと、チームワークのよい教職員。教頭時代は、教職員と共に行事準備や環境美化に率先して動かれる校長先生の姿に、自分もそうなりたいと心に決めていました。

校長になったのは、コロナ禍で休校中の4月でした。初めての様々な取り組みを、チーム「黒河小」で考え、様々な課題を乗り越えてきました。先生方の力は団結したときに何倍にもなることを実感し、その後も「チームで取り組みば、必ず道は開ける。」と信じてきました。そのために、お互いを尊重し、思いやりを忘れず、コミュニケーションを密にすることを大切にしてきました。そのような教職員の雰囲気、子どもたちの成長に大きく寄与していたことは誇らしく思います。日々、先生方が子どもたちに接する姿勢や支援の有様を見るにつけ、自身の担任時代と比べて、その素晴らしさに感心するばかりでした。自分自身は、前任の校長先生の姿から学んだ「率先垂範」「協働意識」を心がけ、自分らしいリーダーシップを貫こうと努力してきたつもりです。

また、見守り隊活動や稲作、伝統野菜黒河マナの栽培、黒河しいたけの学習、さつまいも栽培、読み聞かせなど、地域の方々には大変お世話になってきました。見守り隊、地域コーディネーター、老人クラブ、読み聞かせボランティアの方々はいつでも「黒河の子どもたちのためやから。」と言ってご尽力くださいました。近隣の方々も、常々「学校の子どもの声が聞こえるのにぎやかでいいわ。」と学校の賑わいを好意的に受け止めてくださいました。PTA活動を始め、保護者の皆様からも強力なバックアップをいただきました。保護者はもとより、地域の方々から愛されている学校であることを日々感じ、今後も、信頼され愛される学校であらねばならないと肝に銘じてきました。

校長室の前面と背面の壁には、歴代校長先生の写真が飾られています。恩師の写真も並ぶその中に、第14代校長として私の祖父の写真もありました。恩師や祖父に見守られながら執務に当たれたことは、大きな励みとなりました。私の写真が第34代校長として飾られるときは、祖父と向かい合う位置になるであろうことに不思議な縁とうれしさを感じます。管理職としての8年間すべてをこの黒河小学校で勤め、校長職を終えられることに、感謝するばかりです。

退職を迎えて想う

〈若狭町〉鳥羽小学校長
高橋 彰男

53年前の昭和46年4月。6歳の私は27名の同級生とともに、上中町立鳥羽小学校へ入学しました。これが私と鳥羽小学校との初めての出会いでした。そして時を経て60歳を迎えた今年、校長として2回目の鳥羽小学校卒業を迎えようとしています。振り返ればこれまで生きてきた60年の間、自身の小学生として6年間、4人の子どもがお世話になったPTA会員としての16年間、さらに教諭として5年、教頭として2年、そして今回の校長としての2年間の勤務。さらに父も鳥羽小学校で教諭、教頭、校長として勤務していたこともあり、実に私の人生のうちの40数年間は家族の誰かが鳥羽小学校と関わりをもっていたことになります。

加えて昨年度は鳥羽小学校が明治32年の鳥羽尋常小学校創立から125年を迎え、創立100周年記念事業として埋設されたタイムカプセルを25年ぶりに開封しましたが、その創立100周年を迎えた年にタイムカプセルを埋めた時の校長は私の父でした。

このようなことから、私の37年間の教員キャリアを終える場が鳥羽小学校になったことに、不思議な縁を感じるとともに、感謝の気持ちを持たずにはられません。

その最後を飾る今年度。鳥羽小学校は北陸農政局など関係諸機関と連携し、従来から学校教育田で行っている手作業による田植え、稲刈りを伴う米作りと並行して、私の自宅の圃場を用いたスマート農業による米作りの両方を体験することにしました。そしてその中で、将来、子どもたちが地域を支える人材として成長するとともに、鳥羽地区に古くから伝わる農業を一つの仕事として捉えることができるよう、キャリア教育の推進に努めました。これは、ある意味、今までお世話になった鳥羽地区、鳥羽小学校へ感謝の気持ちを伝えるための取組と言えます。

現在、鳥羽小学校にはこの他、ノーチャイム、約30年前からずっと力を入れている縦割り班活動、そしてその成果が最も表れる校内体育大会である「鳥羽リンピック」などが学校の主な特色として存在しています。これらもまた全て、その時々の職員の鳥羽小をよくしたい、変化の激しい時代で子どもたちが逞しく生きていくことができることを願って実践されてきた取組であります。

今後、少子化が進む中で、鳥羽小学校が将来も現在の姿のまま存続していくことは難しいかもしれませんが。ただ、昨年度実施された学校評価では、「鳥羽のよいところを見つけることができた」と答えた児童が9割を超えていました。このふるさとを大切に想う気持ちをこれからも大事に育てていくことで、将来のふるさと鳥羽を担っていく人材が生まれることを心から期待しています。

校 長 講 話

心を輝かせるポジティブ言葉

〈永平寺町〉志比小学校長
田上 由美

今年も、生活委員会がポジティブ言葉週間の取組を行います。みなさんもポジティブ言葉を見つけましたか。では、ポジティブ言葉ってどんな力があるのでしょうか。「一人一人の大切な心を輝かせる力がある言葉」だと、私は考えます。今日は、みなさんの大切な心を輝かせるための2つのポジティブ言葉についてお話します。耳も目もこちらに向け、心に感じながら聴いてください。

1つ目は「ありがとう」です。「感謝の気持ち」を伝える言葉です。普段からお家の人に「ありがとう」という言葉で感謝の気持ちを伝えていませんか。友だちには？担任の先生や保健や給食の先生には？物を拾ってもらったり、やさしい言葉をかけてもらったり、励ましてもらったり、助けてもらったりした時、自然に「ありがとう」と言っていますか。考えて「ありがとう」ではなく、心に感じてすぐに発する「ありがとう」は感謝の気持ちが伝わり、互いの心が輝き合います。では、悪い行いを止めてくれたり、わがままな言動を注意してくれたり、本当に大事なことを教えるために厳しい言葉をかけてくれたりした時はどうですか？みなさんにとって耳の痛いことでもいやな顔をしないで、心から「ありがとう」と感謝の気持ちを伝えましょう。それは、自身の心輝く大きな成長につながります。

2つ目は「ごめんなさい」です。「素直な気持ち」を持ち続けるための言葉です。人はみな素直な心をもっています。良くないことをした時は「ごめんなさい」と自然に言えることが大事です。同時に「次からは気をつけよう」と思えば、「ごめんなさい」は一気に前向きなポジティブ言葉になります。でもケンカの後には素直になれず、簡単には「ごめんね」が言えません。相手がどんな反応をするかも不安です。しかし、言わないままではその先の互いの心は輝くでしょうか。相手を信じて、勇気を出して自分から「ごめんね」と言うことです。片方が気持ちを伝えれば「ごめんね」と返ってきます。みなさんは、こんな詩を知っていますか。

【暗唱】『こだまでしょうか』

(童謡詩人の金子みすゞ「私と小鳥とすずと」より)

詩の後半に「ごめんね」というと「ごめんね」という、こだまでしょうか、いいえ、だれでも、という文がありました。「ごめんね」を素直に言い合うことで、前に進むことができ、ケンカの前よりも更に良い人間関係を築くことができます。「ありがとう(感謝)」や「ごめんね(素直)」の他にも、みなさんが見つけた素敵なポジティブ言葉を交わし互いの心を輝かせることができるように、これから一人一人が考え実行していったほしいです。最後までしっかり聴いてくれて、ありがとう。

力を惜しむな 時を惜しめ

〈大野市〉上庄小学校長
川端 英郁

みなさんは、校庭のプール横にある日時計を見たことがありますか？

これは、今から50年ほど前に、上庄小学校区の本木出身で本校の卒業生である方から贈られたものです。この日時計の製作者は「日時計の王様」と言われた、小原銀之助さんです。この日時計は、全国でも珍しいもので、福井県で設置されているのは、本校と福井工業大学の2か所だけなのです。本県のお隣の滋賀県にも同じく2か所設置され、競技カルタそして映画やアニメの「ちはやふる」の舞台でも有名な近江神宮にも、これと同じものが設置されています。

そして、この日時計の横には、1本の杭が立てられ、そこには、「力を惜しむな 時を惜しめ」と書かれています。その意味が分かりますか？「力、すなわち努力を惜しんではいけない、それよりも過ぎ去っていく時間を惜しみなさい。」ということなのです。

また、日時計の土台には、「世界は広い 宇宙はもっと広い 大きく広くのびよう」「可能性は無限」「100年後の自分を見つめて」など、いくつかの言葉が書かれています。

この日時計を贈ってくださった方は、時間の大切さを述べるとともに、この上庄小学校で学ぶ子どもたちに向けて、未来を見据えて心豊かに成長し、幸せになってほしいという願いを込めているのでしょう。

では、時間について考えていきましょう。時間はこの世に生きているすべての人に平等に与えられているものです。一日には24時間しかありません。これをどのように使うかで、みなさんの成長や楽しい思い出が変わってきます。例えば、勉強する時間、遊ぶ時間、友達や家族と過ごす時間、すべてが限られています。もし、今やるべきことを後回しにしてしまうと、後で焦ったり、できるはずのことができなくなったりしてしまうことがあります。時間は戻ってこないからこそ、一つ一つの時間を大切に使うことが大事なのです。ですから、毎日を計画的に過ごして、一生懸命に頑張る時間も、楽しい時間も、バランスよく大事にしてほしいと思います。

今年はパリオリンピック・パラリンピックが開かれましたが、参加した選手は、まさに時間を惜しみながら、一生懸命に努力をしてきた人たちです。上庄小学校出身のパラリンピック陸上100mで8位に入賞した伊藤竜也選手も時間を惜しんで練習に励まれたことでしょう。

ぜひ、みなさんには将来の豊かで幸せな人生を目指して、限られた時間を有効に使い、勉強に運動に心づくりに頑張っていってほしいと思います。

「力を惜しむな 時を惜しめ」覚えておいてほしいです。

ふるさと鯖江のお殿様

〈鯖江市〉惜陰小学校長
藤枝美由紀

先週末に、松阜神社のお祭りがありました。お祭りに行った人はどのくらいいますか？松阜神社のお祭りは、正式には秋の例大祭といい、屋台が出たり、ステージでの催しをしたりするだけではなく、神社の本殿で神事が行われます。神事というのはその神社に祭られている神様にお祈りする儀式のことです。神事の一つに「浦安の舞」という踊りの奉納がありました。踊り手は巫女（みこ）と呼ばれ、十二単のような色鮮やかな衣装を着て、髪の毛は後ろでひとつに束ね、額に大きなかんざしを付けます。惜陰小学校からは3人が巫女に立候補し、練習を重ねてきました。ゆっくりした動きですが、手に持った扇や鈴の扱い方にはきちんとした作法があり、そして4人の巫女の動きをそろえなければならぬところが大変だったそうです。当日は、笛や太鼓の音楽に合わせて、優雅にそして堂々と踊りを披露してくれました。私たちの地域に伝わる伝統の踊りが、こうやって受け継がれていくことは大変うれしくありがたいことです。皆さんには地域の行事に積極的に参加し、自分が住んでいる地域についてもっと知ってほしいと思います。それはふるさと鯖江を好きになることにもつながるからです。



約300年前の鯖江は、家もまばらで寂しい村だったそうです。そこにお殿様としてやってきたのが「間部(まなべ)」というお殿様でした。約150年の間に、現在の本町通りに市街地を作ったり、惜陰小学校のもとになった学校を作ったりしました。第7代のお殿様「間部詮勝(まなべあきかつ)」は人々の憩いの場所として嚮陽溪という庭を造り、それが現在の西山公園になっています。この「間部詮勝」を神様として祀っているのが、さっきお話をした松阜神社なのです。さらに「間部詮勝」は惜陰小学校の初代の校長先生でもあります。お殿様の名前「まなべ」は、今も、鯖江のいろいろなところで使われています。西山公園の近くには「まなべの館」という博物館があります。それから「まなべ」という和菓子を売っているお菓子屋さんもあります。最近、マスコットキャラクターとして「まなべくん」が登場しました。

松阜神社の「浦安の舞」をきっかけに、私は鯖江の歴史を学習し、そのことを、是非伝えたいと思いました。皆さんも、自分の住んでいる鯖江について、調べてみてください。まなべの殿様に関する興味深いお話や場所がたくさん見つかるはずです。今日、覚えてほしいキーワードは、ふるさと鯖江を築いた「まなべの殿様」です。



「まなべくん」

日々成長していくこと

〈越前市〉武生南小学校長
内田 達男

私の住んでいる所は、南小学校の校区より少し田舎なので、家の周りにはたくさんの木々が生えています。春が近づくと、朝の5時頃からウグイスの鳴き声が聞こえ、目覚まし時計の代わりになってくれます。ウグイスは、日本全国に生息しており、早春に鳴き始めることから、春告鳥（はるつげどり）とも言われているようです。

ところがこのウグイスの鳴き声が変わるのです。「ケキョ。」「ケキョキョ。」普段耳にする美しい鳴き声と違って、随分とぎこちない鳴き声なのです。今年生まれたばかりの赤ちゃんウグイスの鳴き声かなあと勝手に思っていたのですが、早朝から何回も何回も聞こえるぎこちない鳴き声は、上手に鳴けるようにと一生懸命に練習しているようにも聞こえてきました。

そんな鳴き声も、一ヶ月ほど経つと「ホーホケキョ、ケキョケキョケキョケキョー」と美しい伸びのある鳴き声に変わってきました。みなさんの知っている澄み切った声です。毎朝の練習で上手になったのだなと感心し、私も癒やされて、気持ちよく朝を迎えることができるようになってきました。

私は、ウグイスの鳴き声が練習によって美しくなっていく様子が、学校生活でのみなさんの成長の姿とよく似ているなと思いました。学校で、新しい漢字を覚えるために何回も練習をして書けるようになったり、難しい計算に挑戦して少しずつ解けるようになったり、または運動が上手に出来るようになったり、努力をすることで出来るようになった経験がたくさんあるはずです。練習や努力を継続することで出来るようになるのは、私たち人間もウグイスも同じです。

学校は、知らないことがわかるようになったり、出来ないことが出来るようになったりする所です。簡単に出来るようになったことも、努力が必要で大変だったこともあるでしょうが、1年前の自分と比べてみると驚くほど成長しているはずです。あまり意識をしていないかもしれませんが、日々真面目に取り組んできたことは、確実に自分の力となり、成長につながっていきます。ウグイスのように・・・。

今でもウグイスの声が聞こえてくると、とっても幸せな気持ちになります。みなさんには、「出来た」という幸せな気持ちをたくさん感じる事の出来る1年にするために、日々の小さな努力を継続して欲しいと思います。

令和6年度 専門委員会活動報告

人事行財政対策委員会

本委員会では、学校教育・学校経営のさまざまな課題の解決に向けて、教育行政とパートナーシップを築き、教育の充実や環境整備につなぐことを目的として、「ふくい教育ミライ会議(小中学校長会)」を実施した。実施に当たり、県下の小中学校長から「これからの時代を生きる福井県の子どもたちにつけたい力」、「学校現場での課題と改善策」についてアンケートをとり、結果を集約し、当日の提案原稿を作成した。当日は、それぞれの上位について小中から話題提供をした。

■ふくい教育ミライ会議(小中学校長会) 8/29(木)

本会議は、急遽知事が参加され、県教育長が不参加になるなど予定になかったことが重なったが、県教委から松下学校教育監をはじめ各課課長等7名、県小中学校長会から14名が参加し、次の2つのテーマについて校長会から話題を提供した。また、次期の「教育に関する大綱(案)」について県教委から意見を求められた。

(1) これからの時代を生きる福井県の子どもたちにつけたい力について

(小学校)・課題、探究、解決、創造 に関する力
・多様性、協調性、協働、共生 に関する力
・思考、判断対応、自己決定、突破 に関する力

(中学校)・コミュニケーション能力
・主体的な力

(2) 学校現場での課題と改善策について

- ・教員不足に関すること
- ・定年延長や再任用に関すること
- ・校内サポートルームの開設時間増、及び気がかりな児童生徒への対応に関すること
- ・部活動の地域移行に関すること

(3) 次期の「教育に関する大綱(案)」について

- ・県総合教育会議での資料について意見交換

校長からの話題提供や学校現場の状況説明、提案等に対して、知事をはじめ県教委の方から、すでに支援策を立てていることや今後の対応について回答があった。また、直接知事に時代の流れに対応している学校現場の状況や人手不足での困り感などを伝えることができた。知事の総括は学校現場の困りごとを解決する施策を立てていくことなど、現場主義を通して前向きに検討を進める内容であった。総じて学校現場と行政がベクトルを合わせる会になり、互恵的な関係を築けたと感じている。

(文責: 福井市六条小学校長 藤木 隆之)

調査研究委員会

調査研究委員会では、『子どもたちの「夢と希望」「ふくい愛」を育む教育を推進するための校長の役割Ⅲ』をテーマに、今日的な学校教育の課題、学校運営上の諸問題や社会の変化に即応した学校の取組について、調査研究を行った。

1 調査対象 全小学校185校 [国立1校・市町立184校]

2 調査期間 令和6年6月1日～6月30日

3 調査項目 全連小調査項目の抜粋と会員からの要望

4 調査内容 報告書を参照(県小学校長会HPに掲載)

調査の結果、新学習指導要領の完全実施から5年目を迎えたが、依然として「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」が最重要課題としてあげられていた。これまでも各学校でICT等を活用しながら創意工夫して授業改善に取り組んでいるが、子どもたちにこれからの時代に求められる資質・能力を確実に育むために、さらなる質的向上を目指していることがうかがえる。

また、「特別支援・インクルーシブ教育の構築」は引き続き重要な課題であると捉えられている。インクルーシブ教育の理念を踏まえた特別支援教育の理解・認識の高まりや制度改正により、特別支援教育や個別の支援を必要とする児童は年々増加している。どの子ども共に育つことを目指して、全教職員が特別支援教育の専門性を高めていくとともに、通級や支援員、SCやSSW、関係機関や医療機関との連携など、人的配置を充実させることが求められている。

小学校教育の改善・充実のために学校運営上で最も重視されていたのが「教員の多忙化解消のための校務改善への取組」であった。業務の明確化・適正化の推進や外部人材の活用など、より質の高い教育環境を整備していくことが求められている。また、今年度も教員不足の問題が調査結果に如実に表れた。教員の資質・能力の向上と子どもと向き合う環境づくりの双方の課題解決のためには人員配置が不可欠である。今後も継続して行政にも働きかけながら、校長のリーダーシップのもと働き方改革を進め、教員が本来の業務に集中し、やりがいを感じる環境を整えていくことが必要だといえよう。

その他、本調査報告書では、いじめや不登校の予防・支援、ふるさと教育の推進など、学校運営上の課題について分析・考察している。本報告書が、各校長の現状認識の一層の深化につながり、各学校運営改善の一助になればと思う。

最後に、アンケートに協力いただいた県下小学校長をはじめ、調査研究委員の皆様に、心より感謝申し上げます。

(文責: 福井市安居小学校長 斎藤 瑞恵)

教育研究委員会

1 活動報告

第76回福井県小学校長教育研究二州大会に向けて、研究副主題を「夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び 未来を生き抜く力を育成する学校経営」と設定し、校長の役割や指導等の在り方について実践的な研究を推進した。参集型の研究大会を開催し、意見や感想を直接交換できる貴重な機会となった。

2 主な活動内容

(1) 第1回教育研究専門委員会

期日：4月19日(金) 会場：ユー・アイふくい
○役員選出、年間活動方針、年間行事計画について

○令和6年度・7年度各研究大会について

○県小学校長教育研究二州大会の概要について

(2) 第2回教育研究専門委員会

期日：6月11日(火) 会場：敦賀市立図書館

○県小学校長教育研究二州大会の打合わせ

全体会、分科会の日程と当日の協力体制確認

全体会会場、分科会会場等の下見

(3) 第76回福井県小学校長教育研究二州大会

期日：8月20日(火)

会場：プラザ萬象、敦賀市立図書館、敦賀市生涯学習センター

【分科会発表者】

- | | | |
|---------|---------|---------|
| ①学校経営 | 福井市六条小 | 藤木 隆之校長 |
| ②知性・創造性 | 坂井市三国南小 | 矢部 正道校長 |
| ③人間性・健康 | 福井市一乗小 | 宮本 正三校長 |
| ④人材育成 | 小浜市内外海小 | 一瀬 泰史校長 |
| ⑤危機管理 | 勝山市平泉寺小 | 白木 久子校長 |
| ⑥社会形成能力 | 美浜町美浜西小 | 前田由美子校長 |
| ⑦自立と共生 | 越前市服間小 | 上島 雅恵校長 |
| ⑧連携・協働 | 鯖江市鯖江東小 | 加藤 昌広校長 |
| | 鯖江市片上小 | 茨田 隆徳校長 |

(4) 第58回東海・北陸地区連合小学校長会教育研究愛知大会

期日：10月17日(木) 18日(金)

【分科会発表者】

第3分科会 福井市六条小 藤木 隆之校長

第13分科会 鯖江市鯖江東小 加藤 昌広校長

鯖江市片上小 茨田 隆徳校長

(5) 第3回教育研究専門委員会

期日：1月10日(金) 会場：敦賀市立図書館

○第77回県小学校長教育研究南越大会

○第60回東陸大会、第77回全連小大会

○令和8年度東海北陸福井大会要綱作成

(文責：敦賀市立中郷小学校長 木原 茂子)

編集広報委員会

1 活動報告

「会報」を編集・発行し、県小学校長会及び各専門委員会の活動内容、令和6年度の県小学校長会の主な歩みを全会員に知らせた。また、各会の先輩諸氏の提言を受けて、校長としての指導力向上や今日的課題の把握に資するとともに、会員相互の意見交換の場を提供する情報連絡誌としての役割を果たした。

また、全連小とのつながりから、「小学校時報」および「教育研究シリーズ」「教育研究便覧」の執筆にかかる調整や原稿依頼、執筆等を行った。全連小ホームページ「特色あるR6年度学校」掲載校の確認、調整・決定を行った。

2 主な活動内容

(1) 「会報」の編集・発行(A4判、年2回発行)

①第119号の主な内容

巻頭言、県小学校長学校運営研究大会県教育長祝辞、県小学校長会の活動方針、各専門委員会活動計画、校長講話、新任校長の抱負

②第120号の主な内容

巻頭言、県小学校教育研究二州大会県教育長祝辞、時流潮流、退職校長の言葉、各専門委員会活動報告他

(2) 編集広報委員会

○第1回編集広報委員会 4/19 ユーアイふくい

○第1回編集企画会議 8/1 福井市順化小学校

○第2回編集広報委員会 12/20 オンライン

○第2回編集企画会議 12/20 オンライン

○第3回編集広報委員会 1/16 オンライン

(3) 全連小広報担当者連絡協議会 7/1 東京

(4) 全連小「小学校時報」等の原稿依頼、編集等

○「小学校時報」掲載

・6月号 永平寺町御陵小 田邊尚紀 校長

・8月号 勝山市三室小 玉木由紀 校長

・10月号 南越前町湯尾小 赤澤清和 校長

・12月号 福井市旭小 松宮龍栄 校長

・2月号 福井市酒生小 松村 聡 校長

○「教育研究シリーズ」

・大野市小山小 廣瀬智之 校長

○全連小HP

「特色ある学校紹介」R6年度掲載校

麻生津小、村岡小、明章小、惜陰小、南条小、松原小、大島小

○全連小「特色ある研究校便覧」R6年度掲載校
中藤小、平泉寺小、立待小、小浜小

(5) 県小学校長会HP更新(6月、12月、2月)

(6) 依頼原稿の調整・編集(随時)

(文責：福井市順化小学校長 長谷川季美)

編集
後記

「会報」120号発行に当たり、越前松島水族館 顧問 鈴木隆史様には、お忙しい中、玉稿を賜りました。関係の皆様、会員の皆様からも、経験に基づいた貴重な原稿をお寄せいただき、今号も充実した内容となりましたこと、心より厚くお礼申し上げます。「会報」やホームページが、学校運営の充実の一助となりましたら幸いです。



校長会HP